

10代の母という 生き方 ⑪

大川 聡子

★まえがき

マガジン14～19号で、若年母親へのインタビューを基に、若年母親が持つ社会的経験の特徴について記述しました。今号からは、これまでのインタビューをまとめた考察をしていきたいと思います。

若年母親は、どのような社会的要因の下に出産に至るのでしょうか。14～19号に掲載した若年母親に対するインタビューから、Bongaarts(1982)の図を参考に、若年母親が出産に至るまでの社会的要因・中間要因について[図5]の通り整理しました。

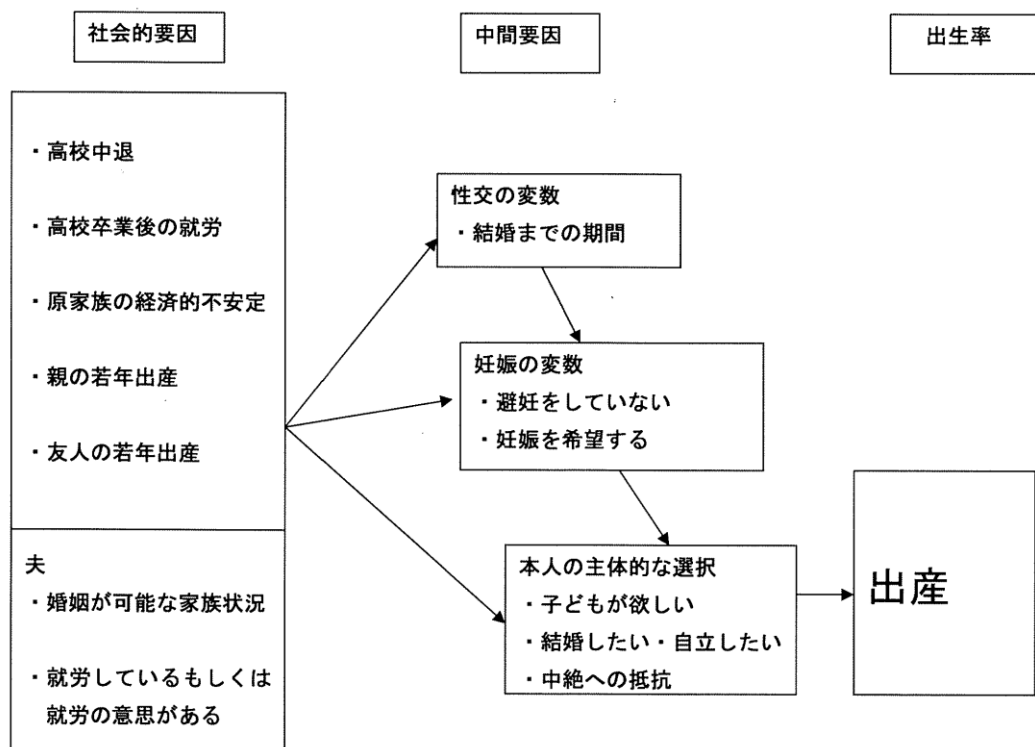


図5 出生率に影響を与える要因

先行研究から、若年母親は経済的問題、教育の中断、夫との関係構築の困難さ、祖父母との同居に伴う問題など、多くの問題を抱えていました。インタビュー結果から、高校中退や経済的に不安定な家庭環境により、中学・高校在学時、もしくは進学せず早期に労働市場に参入していること、また親や友人等の身近な人が若年出産している事が、出産への選択に影響を及ぼしていると考えられます。さらに、夫自身が婚姻可能な家族環境である事、就労している、もしくは就労する意欲があり金銭的に自立をしている事も、出産の選択に影響を及ぼしていると考えられます。妊娠については、避妊しなかった事、または妊娠を希望する事が影響していると考えられます。今回インタビューの内容から「本人の主体的な選択」と名付けた項目を新たに付け加えました。この内容として、子どもが欲しいという思い、結婚したい、または自立したいという思い、中絶への抵抗があると考えました。これらの要因が、若年母親が出産に至る過程において複層的に影響し合っています。

インタビューに答えた若年母親のうち、高校中退もしくは中学卒業の学歴を持つ人は、24名中19人であり、7割を超えています。小川(2009)の調査では10人中7人が中学卒業もしくは高校中退であったため、ほぼ同じ割合です。学齢期の妊娠であっても、母親は出産と学業の継続に葛藤することもなく、強い意志を持って出産を選択していました。こうした背景に原家族の貧困状況が垣間見られます。高校の学費も自分で納め、学生時代からアルバイトを通して家計を支えている母親もいました。こうした状況の下では、強い学習への意欲を持たなければ高校に在学し続けることは困難であったでしょう。一方で、高校生でありながらも金銭的に自立した環境におかれていたことは、出産を実現しやすい環境を作っていたとも考えられます。

高校中退に至るまでの教師の関わり方も様々で、学校に来ず友人と遊んでいる生徒に何度も学校に誘う教師もいれば、本人が在学したいと願っても校則違反のためあっさり退学を宣告されていることもありました。小・中学校での学業達成が困難であった様子も見受けられます。中学までの基礎学力がなければ、高校へ行く意欲を見出せなくなることは必然です。荻谷(2001)が高校生を対象に行なった調査によれば、「意欲」は社会階層によって差が見られ、意欲や、意欲の源泉とされる興味・関心は、各人を取り巻く生育環境やその変化によって影響を受けるといいます。さらに、「相対的に低い階層出身者達にとって、将来のことを考えることをやめ、あくせく勉強しても仕方がないと思うことで高められた〈自信〉は、勉強からの離脱という実際の行動に基づいている。そして勉強から〈降りる〉ことによって自己を肯定できる低い階層の子ども達を〈降りずに〉いさせることはかえって彼らから自己の有能感を奪うことになりかねない」としています。若年母親の中には、経済的に困難な家族の下で、家計を助けるためのアルバイトに励みながら高校に通っている母親もいました。こうした中では、「勉強」は母親達の自己を肯定するものに成り得ず、勉強から〈降り〉、妊娠・出産して母親になることが、自己の有能感を高めること、すなわち自己肯定感を高めることにつながったのではないのでしょうか。

若年出産は、若者を取り巻く社会問題とも強く関連しています。1955年～2009年の人工

妊娠中絶率、出生率、高校中退率(左軸)、高卒内定者の就職率(右軸)を[図 6]に示しました。10代の人工妊娠中絶率、出生率両方とも急激に上昇した2000年は、高校卒業後の就職内定率が90%を切り、高校中退率も上昇しています。高卒者の就職内定率と10代の人工妊娠中絶率は、1990年～2005年にかけて、逆のカーブを描いているように見えます。経済状況が悪く、若者に将来への展望が見えないことも、若年妊娠・出産の要因の一因となっていると考えられます。

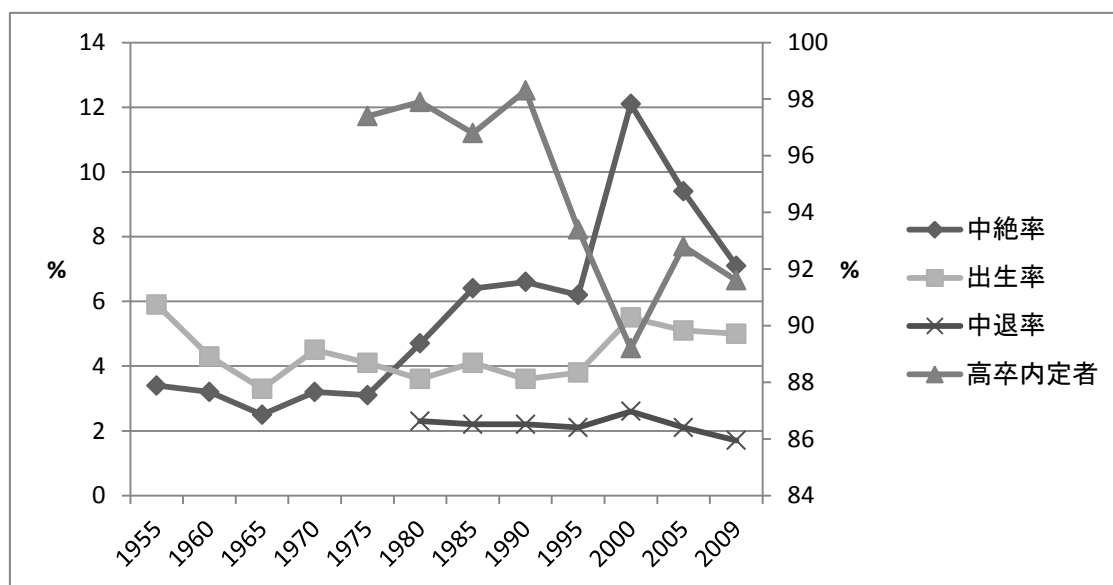


図6 10代の人工妊娠中絶実施率、出生率、高校中退率及び高卒就職内定者数の推移

他にも、高い高校進学率に押されて入学するも、学業への意欲が乏しく、クラスメイトとの関係が築きにくく高校を中退するといった高校中退問題、親世代からの貧困の連鎖、ステップファミリー問題など、若年母親は多くの社会問題が絡み合う環境の中で、「主体的」に出産を選択していました。その結果、社会的に不利な状況が再生産されています。Francesconi(2008)は、「若年母親は社会経済的不利が世代間連鎖する原因であるとし、若年母親を減少させる事により子どもの貧困を根絶させることはなく、また貧困状態にある親の下での子どもの成長に効果ももたらさない。社会的に不利な状況にある子ども達の生存戦略は、人生における機会を拡大することである」としています。若年母親の機会の平等を保障するためには、社会的不利の連鎖が断ち切れるような、貧困や住環境の不備、経済的困難を解消するための環境を整えていくことが必要です。

一方、アメリカ医学研究所(Institute of medicine)は、人々の行動は家族や友人、環境要因等、異なる範囲にある複数の要素の相互作用を受けているという、Bronfenbrenner(1979)のエコロジカルモデルを参考に広い基盤を持ったエコロジカルアプローチを、健康状態の向上のために採用するよう勧めています。本稿では、若年母親の育児に関連する要因について、このモデルを参考にし、インタビュー内容から明らかになった若年母親の育児に関

連する要因について、個人・家族・友人・環境のそれぞれの項目ごとに[図 7]にまとめました。

若年母親の育児を困難にする「個人」的要因については、修学年数の短さ、出産への後悔、子育てへのプレッシャー、支援の受け入れにくさが挙げられました。「家族」では、夫の不安定就労、父親役割の取れない夫、離婚が挙げられました。「友人」では、育児リスクとなる要因はなく、「環境」では、経済的困難、住環境の不備、選べない仕事、周囲との軋轢が挙げられました。若年母親の育児を困難にする要因は、個人や家族だけでなく、出産前から継続している社会的に不利な環境に負うところも大きいです。

一方で、中間要因として「家族」では親の若年出産、「友人」では、友人の若年出産が挙げられました。育児を肯定する要因として、「個人」では、活発な性格、旺盛な自立心、将来を見越した生活設計、自己肯定感の向上が挙げられました。「家族」では家族の支援、「友人」では社会性のない友人との決別、友人の応援、ピアグループ、「環境」では職場の理解、若年母親を理解し継続的に関わる支援者が挙げられました。若年母親は「個人」や「環境」に「育児リスクとなる要因」を多数持っています、「個人」において、活発な性格や将来を見越した生活設計、自己肯定感の向上など「育児を肯定的にする要因」を多く持っています。また「友人」からも育児を肯定する要因を多く得られています。こうした若年母親の長所を生かして、育児リスクとなる要因を排除し、育児を行ないやすい環境を作るための社会資源の整備について検討していく必要があるでしょう。

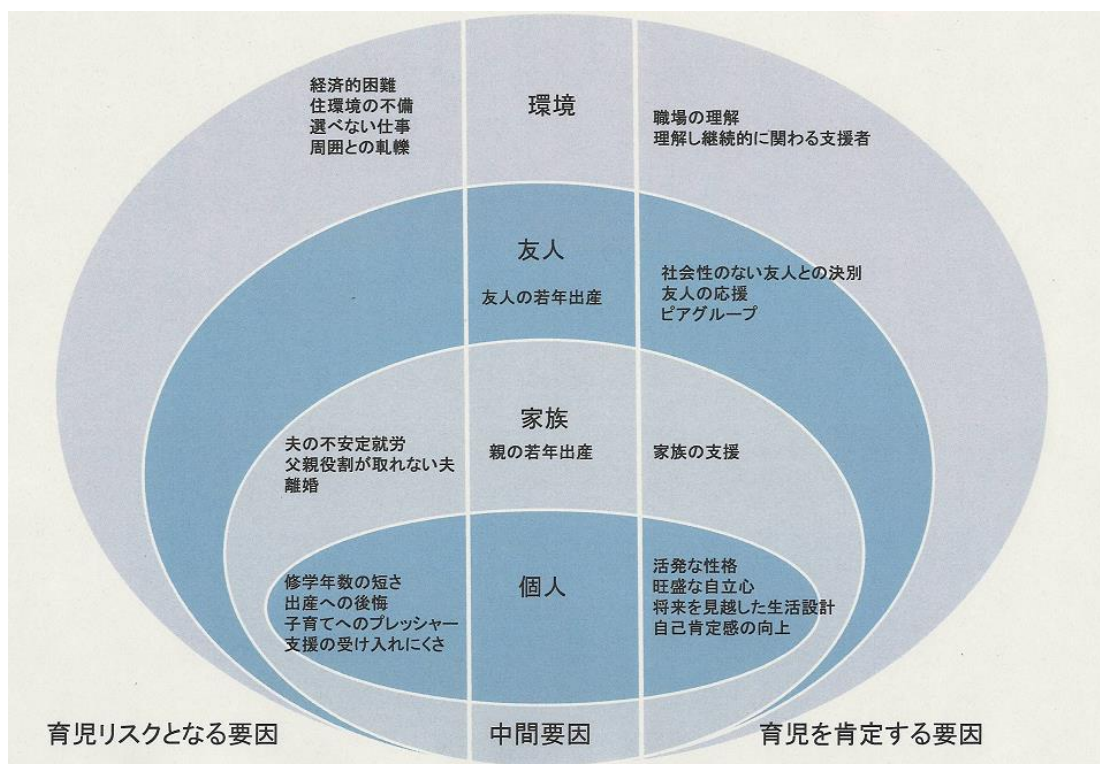


図 7 若年母親の育児に関連するエコロジカルモデル

ここまで、若年出産をもたらす社会的要因について述べました。西田(2009)は社会的不利な条件にある家庭の多い地域での調査において、「世間の狭さ」、「モデルの限定」から、排除の連関としての大人への移行過程が進んでいることを指摘しています。若年出産という「選択」は、これまでの生育暦や周囲の文化に影響を受けた轍をたどっているのに過ぎないのでしょうか。若年母親は「育児を肯定する要因」を多く持っており、インタビューでは、〈子どもが欲しかった〉と若年での出産を主体的に選択している母親もいました。彼女たちの出産したいという思いを支持したものは何だったのでしょうか。次号、若年母親が出産に至る径路を見ることで明らかにしていきます。

★引用文献

- Bongaarts J., 1982, Proximate determinants, In Ross J.A.ed International Encyclopedia of population, Free Press.
- Brofenbrenner, U., 1979, The Ecology of Human Development-Experiments by Nature and Design, (=1996, 磯貝芳郎, 福富護訳, 人間発達の生態学, 川島書店)
- Francesconi M., 2008, Adult outcomes for children of teenage mothers, The Scandinavian Journal of Economics, 110(1), pp93-117.
- Institute of Medicine, 2002, The future of the public's Health in the 21st century, National Academy Press.
- 荻谷剛彦, 2001, 階層化社会と教育危機ー不平等再生産から意欲格差社会へ, 有信堂高文社.
- 西田芳正, 2009, 自己責任論とアンダークラス論を乗り越えるためにー若者と貧困に関する実証研究の課題, 貧困研究, 2, pp72-79.
- 小川久喜子, 2009, 若年妊婦のストレスフルライフイベントにおける対処法略パターンとその変化, 日本保健科学学会誌, 12(2), pp77-90.